

## 12 重積分の変数変換

線形変換と面積  $\mathbb{R}^2$  の線形変換

$$L_A: \mathbb{R}^2 \ni \mathbf{x} \mapsto \mathbf{X} = A\mathbf{x} \in \mathbb{R}^2 \quad (A \text{ は } 2 \text{ 次 の 正 方 行 列})$$

を考える．行列  $A$  が正則，すなわち  $\det A \neq 0$  ならば  $L_A$  は逆写像をもつ．とくに  $L_A$  は 1 対 1 の写像 (単射) である．行列  $A$  が正則であるとき  $L_A$  を正則な線形変換 とよぶ．

補題 12.1. 線形変換  $L_A$  による  $\mathbb{R}^2$  の直線の像は直線または一点である．とくに  $L_A$  が正則ならば直線の像は直線になる．

証明．異なる 2 点  $P, Q \in \mathbb{R}^2$  を結ぶ直線  $l$  の像を調べよう． $P, Q$  の位置ベクトルをそれぞれ  $\mathbf{p}, \mathbf{q}$  とすると直線  $l$  は

$$l = \{(1-t)\mathbf{p} + t\mathbf{q} \mid t \in \mathbb{R}\}$$

と表される．ここで  $L_A$  の線形性から

$$L_A((1-t)\mathbf{p} + t\mathbf{q}) = (1-t)A\mathbf{p} + tA\mathbf{q}$$

なので， $l$  の  $L_A$  による像は

$$l' = \{(1-t)\tilde{\mathbf{p}} + t\tilde{\mathbf{q}} \mid t \in \mathbb{R}\} \quad \tilde{\mathbf{p}} = A\mathbf{p}, \quad \tilde{\mathbf{q}} = A\mathbf{q}$$

とかける．とくに  $\overrightarrow{OP'} = \tilde{\mathbf{p}}, \overrightarrow{OQ'} = \tilde{\mathbf{q}}$  となる点  $P', Q'$  をとると (1)  $P' \neq Q'$  のとき， $l'$  は  $P', Q'$  を通る直線となる．(2)  $P' = Q'$  のとき  $l'$  は  $P'$  1 点からなる集合である．さらに  $\det A \neq 0$  なら写像  $L_A$  は 1 対 1 であるから (2) のケースは起こりえない．□

補題 12.2. 正則な線形変換  $L_A$  による  $\mathbb{R}^2$  の平行な 2 直線の像は平行な 2 直線である．

証明．平行な 2 直線の像は 2 つの直線であるが，これらが交わるとすると  $L_A$  が 1 対 1 であることに反する．□

補題 12.3. 直線  $l$  上の異なる 2 点  $P, Q$  をとっておく．直線  $l$  にない 2 点  $R, S$  が直線  $l$  の同じ側にあるための必要十分条件は， $\det(\overrightarrow{PR}, \overrightarrow{PQ})$  と  $\det(\overrightarrow{PS}, \overrightarrow{PQ})$  が同じ符号をもつことである．ここで  $\mathbb{R}^2$  のベクトルは列ベクトルとみなし， $\det$  は 2 つの 2 次列ベクトルを並べてできる行列の行列式を表す．

証明． ${}^t(a, b) = \overrightarrow{PQ}$  とおき， $\mathbf{n} = {}^t(-b, a)$  とすると，(1)  $\det(\overrightarrow{PQ}, \mathbf{v}) = (\mathbf{v}, \mathbf{n})$  である．ただし右辺は  $\mathbb{R}^2$  の内積を表す．(2)  $\mathbf{n}$  は直線  $l$  に直交する零でないベクトルである．直線  $l$  上にない点  $R$  が，直線  $l$  の  $\mathbf{n}$  が指し示す側にあるための必要十分条件は  $\overrightarrow{PR}$  と  $\mathbf{n}$  が鋭角をなすことである： $(\overrightarrow{PR}, \mathbf{n}) > 0$ ．このことと (1) から結論が得られる．□

補題 12.4. 線形変換  $L_A$  によって， $\mathbb{R}^2$  の平行四辺形とその内部は  $\mathbb{R}^2$  の平行四辺形とその内部，または線分に移る．とくに  $L_A$  が正則ならば平行四辺形の像は平行四辺形である．

証明．簡単のため  $L_A$  が正則であるとし，平行四辺形  $PQRS$  の像を求める： $\mathbf{p} = \overrightarrow{OP}$ ， $\mathbf{q} = \overrightarrow{OQ}$  とすると，線分  $PQ$  は  $\{(1-t)\mathbf{p} + t\mathbf{q} \mid 0 \leq t \leq 1\}$  となるので，その像は線分  $P', Q'$  となる．ただし  $P', Q'$  はそれぞれ  $L_A$  による  $P, Q$  の像．各辺に対して同様のことを考えれば，平行四辺形の像が平行四辺形となることがわかる．さらに，平行四辺形の内部は 4 つの辺を含む直線の一方の側の共通部分なので，補題 12.3 から結論を得る (すこし端折った)．□

補題 12.5. 平行四辺形  $PQRS$  の面積は  $|\det(\mathbf{a}, \mathbf{b})|$  である．ただし  $\mathbf{a} = \overrightarrow{PQ}$ ， $\mathbf{b} = \overrightarrow{PR}$  で，これらを 2 次の列ベクトルとみなしている．

証明．ベクトル  $\mathbf{a}, \mathbf{b}$  のなす角を  $\theta$  とすると，求める面積は

$$(12.1) \quad |\mathbf{a}| |\mathbf{b}| \sin \theta = \sqrt{|\mathbf{a}|^2 |\mathbf{b}|^2 - |\mathbf{a}|^2 |\mathbf{b}|^2 \cos^2 \theta} = \sqrt{|\mathbf{a}|^2 |\mathbf{b}|^2 - (\mathbf{a}, \mathbf{b})^2}.$$

ただし  $(\mathbf{a}, \mathbf{b})$  は  $\mathbf{a}, \mathbf{b}$  の内積を表す．ここで  $\mathbf{a} = {}^t(a_1, a_2)$ ， $\mathbf{b} = {}^t(b_1, b_2)$  とおいて (12.1) を計算すれば結論を得る．□

補題 12.6. 線形変換  $L_A$  による平行四辺形  $D$  の像の面積は， $|\det A| |D|$  である．ただし  $|D|$  は  $D$  の面積である．

証明 . 平行四辺形  $D = PQRS$  の各頂点の位置ベクトルを  $\mathbf{p}, \mathbf{q}, \mathbf{r}, \mathbf{s}$  とし ,

$$\mathbf{a} = \overrightarrow{PQ} = \mathbf{q} - \mathbf{p}, \quad \mathbf{b} = \overrightarrow{PR} = \mathbf{r} - \mathbf{p}$$

とおく .  $P, Q, R$  の  $L_A$  による像をそれぞれ  $P', Q', R'$  と書くと ,

$$\overrightarrow{P'Q'} = A\mathbf{q} - A\mathbf{p} = A(\mathbf{q} - \mathbf{p}) = A\mathbf{a}, \quad \overrightarrow{P'R'} = A\mathbf{b}$$

であるから

$$|D'| = |\det(A\mathbf{a}, A\mathbf{b})| = |\det(A(\mathbf{a}, \mathbf{b}))| = |\det A \cdot \det(\mathbf{a}, \mathbf{b})| = |\det A| |D|.$$

□

## 2 変数の変数変換 $\mathbb{R}^2$ の領域上で定義された $C^1$ -級写像

$$F: \mathbb{R}^2 \supset (u, v) \mapsto F(u, v) = (x(u, v), y(u, v)) \in \mathbb{R}^2$$

を考える . 微分可能性から

$$\begin{aligned} & F(a+h, b+k) \\ &= F(a, b) + \begin{pmatrix} x_u(a, b) & x_v(a, b) \\ y_u(a, b) & y_v(a, b) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} h \\ k \end{pmatrix} + \sqrt{h^2 + k^2} \varepsilon(h, k) \\ & \quad |\varepsilon(h, k)| \rightarrow 0 \quad \text{as } (h, k) \rightarrow (0, 0) \end{aligned}$$

と書ける . この  ${}^t(h, k)$  の係数行列は ,  $F$  の微分  $dF$  またはヤコビ行列 (第 6 節) である . このことから ,  $(h, k)$  が十分小さいときは , 近似式

$$\Phi(h, k) := F(a+h, b+k) - F(a, b) \doteq \begin{pmatrix} x_u(a, b) & x_v(a, b) \\ y_u(a, b) & y_v(a, b) \end{pmatrix} \begin{pmatrix} h \\ k \end{pmatrix}$$

が成り立つ .

記号 . ヤコビ行列の行列式を

$$\frac{\partial(x, y)}{\partial(u, v)} = \det \begin{pmatrix} x_u & x_v \\ y_u & y_v \end{pmatrix}$$

と書き , ヤコビ行列式 , Jacobian という .

以下 ,

$$\frac{\partial(x, y)}{\partial(u, v)} \neq 0$$

が至るところ成立しているとする .

定理 12.7 (重積分の変数変換 ; テキスト 92 ページ) . 上の状況で  $xy$  平面上的コンパクト集合  $D$  と  $uv$  平面上的コンパクト集合  $E$  が  $F$  によって 1 対 1 に対応しているとき ,

$$\iint_D f(x, y) dx dy = \iint_E f(x(u, v), y(u, v)) \left| \frac{\partial(x, y)}{\partial(u, v)} \right| du dv$$

が成り立つ .

## 問題 12

12-1 テキスト 94 ページ , 問 6, 7; 95 ページ , 問 8, 9.

12-2 テキスト 97 ページ問 10.

12-3 テキスト 100 ページ , 問 11, 12; 101 ページ , 問 13, 14 .

12-4 テキスト 119 ページ (章末問題) 1, 2, 3, 4.